

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 3日現在

機関番号：32641

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820012

研究課題名（和文） 20世紀両大戦間期のフランスにおける言語中心主義の系譜

研究課題名（英文） A genealogy of the modern French version of nominalism in the interwar period

## 研究代表者

本田 貴久 (HONDA TAKAHISA)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：50610292

## 研究成果の概要（和文）：

ジャン・ポーランやミシェル・レリスといった両大戦間期フランスの文学者の言語観が研究対象である。まずポーランという人物について、彼の故郷ニームについて『フランス文化事典』にコラムを執筆した。また『新フランス評論』の計量的分析を行った。

さらにレリスの詩作品と言語観に触れた発表をボルドー大学で開催された国際シンポジウムで行った。

また、ウィリアム・マルクス氏と知己を得、彼の著作『文人伝』の翻訳を始めた。

## 研究成果の概要（英文）：

The object of my study is the literature authors who were active in the interwar period in France, such as Jean Paulhan, Michel Leiris. First, I wrote about the city where Paulhan grew up in the *Dictionary of the French culture*. And then, I analyzed *La Nouvelle Revue Française*, the literary review where Paulhan worked as director.

About Leiris, I presented his point of view of the language and his poetics in the symposium which held at the University of Bordeaux.

Then, I come to know Mr. William Marx ( professor of the University of Paris 10 ), specialist of the literary tradition from the Antiquities to the modern age. I started the translation of his book entitled *La Vie du littéré*, which contains the abundant informations about the traditional consistency of how the authors view the language as a tool of viewing the world itself.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：仏語・仏語圏文学

キーワード：シュルレアリスム、モデルニテ、モダニズム、詩学、自伝、新フランス評論、ジャン・ポーラン、ミシェル・レリス

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、筆者の関心は、シュルレアリスムや、文化人類学の知見に影響を受けた作家の作品に関心を持っていた。個々の作家、アンドレ・ブルトン、ジョルジュ・バタイユなど、それぞれの潮流を主導した作家を中心として、テキストを精読することでその独自性を見極めることが必要であった。そのうえで、時代背景を研究することで、同時代性に意識した読解が必要となった。さらに、同時代性を歴史的な視点から、ながめることによって、このフランス両大戦間期フランスの知的世界の活気を 19 世紀後半から本格化する植民地帝国主義や産業資本主義といった近代社会へのひとつの批判的な思想としてみることでできないかという課題に出会うことになった。

## 2. 研究の目的

韻文・散文にかかわらず、文学者は、自らの表現媒体である言語をどうみなしているのか。また言語をめぐる意識は作品にいかなる形で反映されるのか。文学と言語の問題は、古典古代の雄弁学・修辞学にはじまり、中世の普遍論争における唯名論、絶対王政期のヨーロッパ諸言語間の翻訳の問題、19 世紀のフランスのボードレー、ランボー、マラルメといった詩人達の詩的言語の見直しを経て、20 世紀、両大戦間期に登場した文学的前衛、すなわちダダイズムやシュルレアリスム、といった文学運動にいたるまで、様々に変奏されてきた。本研究は、とくに 20 世紀のフランスにおいて、言語中心主義的な思考の文学（すなわち、現実を観察するという人間の科学的認識は、比喩や文彩といったレトリックという色眼鏡を通してしか行われえないという考え）

における水脈をジャン・ポーランという 20 世紀前半のフランスの文壇を主導したといってもよい編集者を中心に辿り直すという試みである。

## 3. 研究方法

2 年間計画のうち、古代から 20 世紀にかけてのヨーロッパを中心とした文学史を、言語中心の文学観という観点から連続的にとらえ直すという大なる目標の下、その転回点を隠すはずである 20 世紀前半、とくに両大戦間期の文学を『新フランス評論』および同誌の中心的人物であったジャン・ポーランを中心に研究する。書簡や評論などの現地調査を含め、これまで出版されてきた関係資料を積極的に蒐集し、分析する。

また本研究の理論的枠組みとは、19 世紀後半のマラルメの詩論、20 世紀前半にあらわれたフェルディナン・ド・ソシュールの言語論・記号学、それに触発された構造主義文学論、ヌーヴォー・ロマンなどのより現代的な文学運動を形成した言語観である。いずれの分野も相当程度研究されており、わたしはそれらの研究成果を集め、言語中心主義的文学観という設定の普遍性を提示するべく研究をする。

その上で、ジャン・ポーラン、ミシェル・レリスといった作家の具体的な事例に寄り添う形で仮説を検証することになる。研究は次のように 5 つのテーマに分けた。

①『新フランス評論 *Nouvelle Revue Française*』誌の計量的分析。ポーランが編集長をつとめた期間（1925～1940）にこの雑誌に顕著な特徴が見られないかを分析する。

②ジャン・ポーランの資料収集

ジャン・ポーランという人物は作家というよ

りも上述した雑誌の編集長として著名であり、彼のテキストがフランスや日本で十分に読まれているとは言いがたい。とはいえ、ここ十年ほど、ポーランの娘がポーランの書簡や未発表テキストを精力的に資料として出版し始め、ガリマール社からも全集の刊行がはじまっている。こうした資料を含め、これまでのポーランがさまざまな媒体に書いたり、話したものを蒐集する。

### ③書簡集の分析

ポーランが雑誌に寄稿する作家に、なにを求めたのか、つまり、当時の作家・知識人の関心の所在を近年出版された書簡集でのやりとりを通じて具体的に研究する。

④言語中心主義的言語観を早い時期から（すなわち 20 世紀後半に構造主義やポスト構造主義を通してその存在が明白になる前から）、実践していた作家を中心にその様態をテキストから分析する。具体的には、シュルレアリストであり、文化人類学者であり、精神分析治療を受けたミシェル・レリスという人物のテキストがその研究の対象となった。

### ⑤ ポーランの言語中主義的文学観の再理論化への試み。

ポーランは、修辞学の復権を 1936 年に『タルブの花』で訴えた、修辞学（レトリック）は古代ギリシャ・ローマの詩学や雄弁術の基本として少なくとも 19 世紀前半に至るまでは教育の確固たる基礎として学ばれていた。近代に入ると修辞学は、実証主義にはそぐわないものとして排除されていく。それでもポーランは、思考の枠組みとして修辞学こそが人間精神を作動させているということを主張した。

このポーランの主張を、まずは古典的修辞

学の歴史を概観しつつ、現代の構造主義者たちによるレトリック論（ジェラルド・ジュネット、ジャック・デリダ、ミシェル・ドゥギー、ブリュノ・クレマン）のなかでその存在意義を理論的に見出すことができるのかを検証する。

### 4. 研究成果

学者は、自らの表現媒体である言語をどうみなしているのか。また言語をめぐる意識は作品においていかなる形で反映されるのかという問題は、古典古代から現代にいたるまで長い水脈を保っている。本研究においては、ジャン・ポーランやミシェル・レリスといった両大戦間期に文壇に活躍した批評家や詩人の言語観を中心に考察を行ったが、その結果、研究の四つの方向性で行われることになった。

第一に、ジャン・ポーランという人物について調査を続行している。人物研究の副産物として、彼の生まれ故郷であるニームについて『フランス文化事典』にコラムを執筆した。また『新フランス評論』の計量的分析、すなわちこの雑誌の編集長としてポーランがいかなる編集方針で編集を行ってきたかを調査した。その結果、ジャン・ポーランが編集長になってから人類学の分野で活躍する人物の評論なり作品を掲載してきたことが特徴として明らかになる。ここから第二の方向性が表れてきた。文学と人類学の両方に興味を抱いた文学者は多いが、その中でもミシェル・レリスは、ジャン・ポーランとも近く、独特の言語観を持っていた。ボルドー大学で開催された国際シンポジウムでは、レリスの詩作品と言語観に触れた発表をフランス語で行った。

第三に、研究の目的として触れた古典古代の雄弁学と修辞学にはじまり、現代へとい

たる文学者の文学観の歴史の泰斗である、フランス人研究者のウィリアム・マルクス氏と知己を得、彼の著作『文人伝』の翻訳に着手することになった。この評論では、洋の東西や聖俗を問わず、文学愛好者の言語意識について手際よく触れられており、本研究において大いに役立つ内容を備えている。

第四に、言語観が社会からどれだけ影響を受けているのかという問題と出会った。関心を共有する研究者とともに各地に起こるモダニズム運動を研究する「モダニズム研究会」を立ち上げた。今後さらに発展が期待される研究となるであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

① Takahisa HONDA, La Poétique de Michel Leiris, Colloque international « Soi disant – poésie et empêchement », Université Bordeaux 3, 12 septembre 2012.

[図書] (計 2 件)

① 田村毅、塩川徹也、鈴木雅生、本田貴久ほか、『フランス文化事典』、丸善出版社、2012年、408-409, 573, 588-589 頁。

② ジャン＝ピエール・デュピュイ『ありえないことが現実になるとき』、筑摩書房、2012年、94～225 頁 [本田貴久共訳]。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

本田 貴久 (HONDA TAKAHISA)

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：50610292